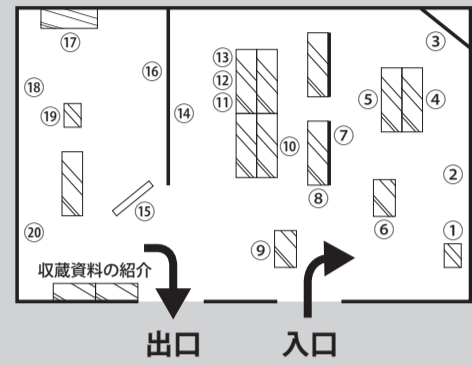


① 8時15分で止まった時計 川越明人 寄贈	② きのこ雲 米軍 撮影	③ 火傷と負傷にあえぐ被爆者 松重美人 撮影 中国新聞社 提供	④ 変形したガラスびん 玖島園助 寄贈
⑤ 手提金庫 岡野重次郎 寄贈	⑥ 三輪車 鎌谷信男 寄贈	⑦ 人影の石(写真) 佐々木雄一郎 撮影 塩浦雄悟 提供	⑧ ワンピース 寺尾寛 寄贈
⑨ 三人の中学生の遺品 上田キヨ・津田蔵吉・福岡重春 寄贈	企画展示室 MAP		⑩ 最後の日記 植田規子 寄贈
⑪ 焼けたカードケース 河本集作 寄贈			⑫ 形見のビー玉 松田雪美 寄贈
⑬ 弟の形見の弁当箱 加納恒治 寄贈	⑭ 火傷した女性 尾糠政美 撮影	⑮ 一人の男の幼児が門にすがって泣いていた。声をかけてさわってみると彼は死んでいた。 被爆者が描いた原爆の絵	⑯ 皮下出血による紫斑が出た兵士 木村権一 撮影
⑰ 黒い雨のあとが残った白壁 八島秋次郎 寄贈	⑱ 原爆白内障患者の目 広島大学医学部 眼科教室 提供	⑲ 佐々木禎子さんの折鶴 佐々木繁夫・雅弘 寄贈 Ari Beser 撮影	⑳ 焦土に咲いたカンナの花 松本榮一 撮影 朝日新聞社 提供

① 	② 	③ 	④ 
⑤ 	⑥ 	⑦ 	⑧ 
⑨ 	1945年8月6日 原子爆弾による 被害の概要		⑩ 
⑪ 	広島平和記念資料館 東館1F 企画展示室		⑫ 
⑬ 	⑭ 	⑮ 	⑯ 
⑰ 	⑱ 	⑲ 	⑳ 

原子爆弾による被害の概要 この展示は、2019年(平成31年)の全館オープンまでの間、閉館中の本館に代わって被爆の実相を伝えるものです。これまで本館において展示していた資料のほか、収蔵庫で保管していた資料、近年寄贈された遺品なども展示しています。	被害の全体像 原爆は広島市の上空600メートルで大きく裂け、強烈な熱線、爆風、放射線が街を襲いました。被害は市の全域に及び、建物の90パーセント以上が焼失または破壊されました。年齢や男女の区別なく多くの命が犠牲となり、遺骨はおろか遺品さえ残すことができない人々も数多くいました。1945年(昭和20年)12月末までに約14万人が亡くなったと推定されています。その後も放射線による障害が、長期間にわたって人々を苦しめました。	救援・救護活動 原爆による被害は瞬時に全市に及びました。官公庁は壊滅状態となり、通信や交通機関も麻痺しました。一方、被爆直後から救護活動が始まり、翌日には軍・官・民一体となった活動が計画され、負傷者の救急処置、救護所への搬送、遺体の処理、食糧の配給などが行われるようになりました。
 焼けた人形の置物 岡田初枝 寄贈・江成常夫 撮影	 本通りから見た爆心方面 岸田真直 撮影・岸田哲平 提供	 やけどを負った中学生 長岡省吾 収集
急性障害 被爆直後から短期間に現れた熱線、爆風や放射線による一連の症状を急性障害といいます。放射線による主な急性障害には、脱毛、下痢・粘血便・歯茎からの出血などの粘膜の障害、血液を造る機能の低下などがあります。急性障害は被爆から約5か月後の12月末にはほぼ終息しました。	黒い雨 爆発の直後、きのこ雲が立ち上り、泥やチリなどが上空に巻き上げられました。さらに、爆発後に発生した大火災によるススが、暖められた空気とともに上空に吹き上げられました。これらのチリやススなどは放射能を帯びており、空気中の水滴と混じり雨粒となって地上に降りました。この雨は「黒い雨」と呼ばれました。	後障害 原爆による障害は1945年(昭和20年)末で収まったかのように見えたが、その後もさまざまな障害が現れました。急性障害がほぼ終わったところから現れた障害を後障害といいます。ケロイドに始まり、その後は特に白内障、白血病、悪性腫瘍(がん)、胎内被爆者の障害などの発生率が高くなりました。
 頭髪が抜けた姉弟 菊池俊吉 撮影・田子はるみ 提供	 水がほしかったのです 高蔵信子 作	 背中や両腕がケロイドになった女性 米軍 撮影

白血病の少女の死 — 佐々木禎子さん 佐々木禎子さんは、2歳の時に被爆し、その後元気に成長しましたが、9年後に突然白血病を発症しました。回復を願って包み紙などで鶴を折り続けましたが、8か月の闘病生活の後、亡くなりました。禎子さんの死をきっかけに、原爆で亡くなった子どもたちの霊を慰め平和を築くための像をつくらうという運動が始まり「原爆の子の像」が完成しました。	 同室だった少女と記念撮影 大倉記代 提供	 きんちゃく 佐々木繁夫・雅弘 寄贈	 ぞうり 佐々木繁夫・雅弘 寄贈	 折鶴 佐々木繁夫・雅弘 寄贈 Ari Beser 撮影
収蔵資料の紹介 — お母さんに会いたい	母の軍手とタオル  高木尊之 寄贈 高木敏子さんは、勤労奉仕中に被爆。全身に熱線を浴びました。顔は黒焦げに焼かれ、家族でも見分けがつかないほどでした。夫の尊之さんは、市内を奔走して薬を手に入れ、懸命に看護を続けました。しかし、敏子さんは高熱を出し、全身のやけどの傷が化のう。容態は悪化し続けました。10日午前10時50分、敏子さんは、苦しみ抜いた末に、夫と3人の子を残して、亡くなりました。この軍手とタオルは、敏子さんが被爆当日に身につけていたものです。	母の腕時計  石井美智子 寄贈 (終戦の)翌日から兄が寝込んでしまった。下痢が続く、頭の毛が抜け始め、日々に衰弱していった。20日頃、兄が「今まで待っていてもお父さんやお母さんが来ないということは、万一ということもあるの、形見となるものをこの仏壇の横に置いてあるから」と言った。兄は、最後まで、両親が亡くなったとは言わなかった。形見のようなものと云ったのは、箱の中に入っていた両親の遺骨と母の焼けた腕時計であった。こうして四大家族は、私一人となった。 <美智子さんの手記より>		
母の仕事道具であった分銅  大前茂樹 寄贈 薬剤師だった中村菊枝さんは、夫を亡くし、薬局を営みながら息子の圭二さんと二人で暮らしていました。戦況が悪化、圭二さんを縁故疎開させることにした菊枝さんは、後からすぐに行くこと約束しました。しかし、薬剤師であった菊枝さんは、市内を離れることを許されず、爆心地から700メートルの勤務地で被爆死したとされます。親族が、8月7日、8日と市内各所を回り、捜しましたが、現在も遺体すら見つかりません。 この分銅は、菊枝さんの自宅焼け跡から見つけ出したものです。	母が愛用していたはさみ  和久井和子 寄贈 (自宅焼跡の)灰を一掻きするときれいに白骨となった母が居ました。側には西洋バサミが焼けただけ、裁縫でもしていたのでしょうか。仏壇の前に座ると、今でも、「お母さんが恋しい、会いたい」と思います。 父に悲しい顔を見せることが出来ず、耐えてきました。でも何度も夢に母と弟が出てきました。触れそうなくらい鮮明に。どれだけそんな夢をみたか、分かりません。 <和子さんの手記とお話より>			